

2019年9月8日（日）「恵みの契約の完成」

マタイ 26:26-29

26 また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福した後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」27 また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。28 これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。29 ただ、言うておきます。わたしの父の御国で、あなたがたと新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」

【序論】

当教会では通常、第一主日に聖餐式を執り行なっていますが、今回は第二主日とさせていただきます。それは、今日のテキストを通して、聖餐の意味を深く味わった上であずかりたいと思ったからです。前回扱った、過越の食事におけるユダの裏切りの場面でもよかったのかも知れませんが、やはり今日の箇所ほど聖餐式にふさわしいところはないでしょう。説教と聖餐は本来一つのものとして認識される必要があります。説教が主イエスの救いを言葉で表すものであるならば、聖餐は体感するものと言ってもよいでしょう。聴覚のみならず、視覚、感覚、味覚を通して主の恵みを知る機会となるのです。

【本論】

本論 1. 業の契約の失敗

また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福した後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」(26:26)

これは過越の祭の食事中の出来事。時は夜です。主イエスはパンを裂いて弟子たち一人一人に配られました。ここで「パン」というものに着目してみたいのですが、これまで福音書を学んでくる中で何度か出てきたことを思い起こすでしょう。パンにまつわる代表的な二つの奇跡、五千人の給食と四千人の給食との関連は見逃せません。主イエスはかつて、何もないところで多くの人を養われました。そのときに、パンを食べた人々は、その奇跡の意味をよく考えることもなかったかも知れませんが、主イエスの中では恐らく、今日の「最後の晩餐」のイメージが既にあったと想像します。と申しますのは、使

われている言葉に多くの共通点があるからです。

- ・ そしてイエスは、群衆に命じて草の上にすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。(14:19)
- ・ それから、七つのパンと魚とを取り、感謝をささげてからそれを裂き、弟子たちに与えられた。そして、弟子たちは群衆に配った。(15:36)

この時はまだおぼろげにしか見えていませんでしたが、主は既にこの群衆のためにも、やがてご自分のからだを裂くことになるという認識をもっておられたはずです。「これはわたしのからだです」という言葉は、パンは主のからだを「意味する」ということを伝えている。そして、これは主イエスから弟子たちに一方的に与えられるのです。

最後の晩餐が、主イエスと弟子たちとの間で交わされた「契約」だったとすると、一体どのような契約が結ばれたのでしょうか。このことを根本から理解するためには、私たちは創世記における神とアダムとの契約に戻っていかなくてはなりません。そもそも契約というのは、私たちが生きる世界で欠かすことのできない、複数の人間間の法律行為です。二人以上の人間が、何らかの取り決めをする際に、約束事を確認し合う。もしそれを破ったらどういう罰則があるかも、あらかじめ定めておく。この罰則が、言わば拘束力をもって、両者が合意したことを相互に守らせるのです。

神は人間との関わりにおいて、契約を交わされました。人類の始祖は樂園で永遠に生きるべき存在として、神との関わりをのちを歩んでいた。神と人との関係には一糸乱れぬ緊密性があり、両者の間には全き愛がありました。しかし、この関係を持続するにあたって、神は一つの条件を設けられた。それは、園の中央にある木からだけは（実を）取って食べてはならないという戒めでした。これは、人間が神の主権を認めながら生き続けることを意味していた。もし戒めを破れば、人は死ぬべき存在になるという結果が、あらかじめ定められていました。これは、神とアダムとの間で交わされた「業の契約」と呼ばれるものであり、アダムが約束を守るという「行為」によって、この契約関係は保持されたのです。しかしながら、アダムはエバと共にこの契約を破ってしまった。「業」において、神に従うことができなかったのです。

このことが私たちとどう関わっているかということに思いを馳せてみたい。人間は悪いと分かっているが、やめられないことが必ずあります。一番分かりやすいのは、嘘をつくということでしょう。親は子どもに「嘘をついてはいけないよ」と教えます。しかし、子どもは嘘をつきます。本能的に嘘をつくことで、自分を守ろうとするのです。子どもならまだしも、大人が嘘をつくならば、もっと深刻な結果をもたらすでしょう。

本論 2. 恵みの契約の完成

さて、アダムの契約違反は人類全体に受け継がれ、神と人間との間には根源的な溝ができてしまいました。「罪」とは「神からの離反」であり、人間は誰もが神に背を向けて生まれてくるようになったのです。しかし、神はそのような人類をお見捨てにはならなかった。そして、尚も人類と契約を結ぼうとなさいます。契約違反者として生まれてくる者と契約を結ぶのです。敢えて言うならば、ブラックリストに載っている人と契約を結ぶようなものでしょう。そのために神が考え出した契約は、普通のものではありません。それは、神の側が一方的に契約を守り続ける「恵みの契約」という新しい手段でした。このことを顕著に表している一つの記事を挙げてみましょう。

また彼に仰せられた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデヤ人のウルからあなたを連れ出した主である。」彼は申し上げた。「神、主よ。それが私の所有であることを、どのようにして知ることができましょうか。すると彼に仰せられた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩とそのひなを持って来なさい。」彼はそれら全部を持って来て、それらを真つ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。しかし、鳥は切り裂かなかった。《中略》 さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。(創世記15:7-17)

これは、神とアブラハムとの間で交わされた契約です。当時の人間同士の契約の方法がここでも踏襲されているのですが、この時代、人々は契約時に動物を二つに切り裂き、両者がその裂かれた動物の間を通るという儀式を行ないました。これは、お互いにどこまでも真実を尽くすことの象徴であり、もし約束を破ったなら、この動物と同じようになって構わないという意志表明だったのです。まさに、命がけの契約であります。ところが、ここで神がアブラハムと交わしている契約においては、神だけが動物の間を通っている。「煙の立つかまど」「燃えているたいまつ」というのは、神がそこにおられること（神の臨在）を表す。アブラハムはそれを見ているだけなのです。これは何を意味するかと言うと、神とアブラハムとの間の契約は、神が一方的に契約を守り続けてくださる「恵み」に基づいているということです。では、アブラハムは何をしなくてはならないかと言うと、彼は信じるのみ。神の約束を信じることで契約履行者と認められるのです（創世 15:6）。

このアブラハム契約は、旧約イスラエルの歴史において、何度も更新されていきます。特に、エレミヤ 31 章に出てくる「新しい契約」においては、やがて世に来られるキリストによって、この「恵みの契約」が完成することが預言されている。民は罪を犯す。

しかし、神はその罪をキリストの十字架において二度と思い起こさない。

見よ。その日が来る。--主の御告げ--その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。--主の御告げ--彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。--主の御告げ--わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもはや、『主を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。--主の御告げ--わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」(エレミヤ31:31-34)

「恵みの契約」は一見、無条件に与えられるように見えます。しかし、契約違反には必ず罰則が適用されなくてはならない。違反者は、切り裂かれた動物のようにならなくてはならないのです。しかし、神はその罰則をご自身で引き受けてくださる。神のひとり子にその罰を背負わせることによって…。旧約聖書全体が、主イエスの十字架を待ち望んでいるのです。

本論 3. 第四の杯は十字架に持ち越される

今日はテキストそのものからやや離れて語らせていただいておりますが、最後の晩餐に含まれている意味は、旧約聖書から流れてきている「契約」を無視しては、どうしても分からないからです。

また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。(26:27-28)

パンの次は「杯」です。主はぶどう酒を取り、弟子たちにお与えになりました。そして、そのぶどう酒にも意味を付け加えられた。それは、「わたしの契約の血」「罪を赦すために多くの人のために流されるもの」という意味です。ところで、なぜパンと杯なのでしょう。パンがキリストのからだを表すのであれば、からだには血も含まれているのだから、敢えて「血」を象徴するぶどう酒を与える必要はないのではないか。主が改めて「流される血」を強調するところには、ご自分の死が**犠牲の死**であることを表すためであると思われます。旧約時代、神と、罪を犯した人間との契約が保持されるために、違反の償いは動物の命で支払いました。犠牲の動物が殺され、血を流し、それが「贖いの代価」となったのです。贖いとは、元々は奴隷の身分の者を相当の代価を支払って買い戻すと

きに使われる商取引の用語でしたが、神が罪に囚われた人間を買い戻すために「動物の命」という代価を必要とする宗教的な意味に置き換えられていきました。

このような前提に立って主イエスのことばを読むときに、主はご自分の死を「贖いの代価」と捉えておられることがよく理解できるでしょう。主はご自分を一匹の羊になぞらえ、「神の小羊」として、それも他に代えることは決してできない完全なる犠牲の動物として、ただ一度ご自分をささげられたのです。

雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行うために。』」すなわち、初めには、「あなたは、いけにえとささげ物、全焼のいけにえと罪のためのいけにえ(すなわち、律法に従ってささげられる、いろいろの物)を望まず、またそれらで満足されませんでした」と言い、また、「さあ、わたしはあなたのみこころを行うために来ました」と言われたのです。後者が立てられるために、前者が廃止されるのです。このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。(ヘブル10:4-10)

神は不完全な動物のいけにえでは満足することができなかった。だから、繰り返し犠牲がささげられたのです。しかし、主イエスは「神の小羊」として、ただ一度ご自分を神におささげになりました。過越の祭の、まさに犠牲の小羊がささげられる時間を選んで十字架にお架かりになった。この完全な犠牲によって、主イエスを信じるすべての人に永遠の罪の赦しを与えられるのです。

ただ、言っておきます。わたしの父の御国で、あなたがたと新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」(26:29)

この29節の言葉は少々謎めいています。主は地上においてはもう二度と杯を口にされないとされます。ユダヤの過越の食事では、通常4回杯が交わされました。最後の晩餐でも、恐らく3回目までの杯が飲まれていたと思われます。では、4回目はどこで交わされるかというと、それは十字架においてなのです。主イエスにとって十字架とはまさしく「苦い杯」でした(26:42)。しかし、それを飲み干される。主が十字架という杯を飲まれる時、まさにその時、私たちは罪との関係が切れるのです。そして、そこに新しい神との関係が始まる。神との永遠の契約がそこに成立する。主イエスはアブラハム契約の線上で、その「恵みの契約」を完成させてくださったのです。

【結論】

今日は「契約」を中心として、主の晩餐の理解に努めました。神の小羊、イエス・キリストの死が、どれほど間違いのない罪の赦しを私たちにもたらすかがご理解いただけたのではないのでしょうか。この神の恵みに依り頼むということは、限りない安心を私たちに与える。たとえ私たちが救いの確信をもつことができなかったとしても、神の恵みの深さ、広さに信頼してみましよう。実は、それこそが信仰なのです。神との交わりを喜び楽しむ人生の第一歩を踏み出していただきたいと願います。

【祈り】

恵み深い天の父なる神様。私たちの始祖アダムは「業の契約」を守れませんでした。私たちにも守ることはできません。あなたが計画し、始め、更新し、完成に至らせてくださった「恵みの契約」こそが、私たちに救いをもたらします。私たちに求められているのは信じることです。犠牲は既にキリストにおいて払われました。今すぐにでも、あなたとの契約関係に入ることができるのです。この恵みを一人でも多くの人が受け取ることができますように。そして、この教会が恵みを宣べ伝える使命を全うすることができますよう、力を与えてください。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、
人類に祝福を与えるため、始祖アダムと契約を結び給うた、父なる神の愛。
連綿と続く「恵みの契約」の完成として、十字架の御業を全うし給うた、主イエス・キリストの恵み。
神の「愛の論理」に理解を与え、その招きを受け入れさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。